

『グレープフルーツ・ジュース』 オノ・ヨーコ／著 講談社

ビートルズのジョン・レノンのパートナーであった、オノ・ヨーコはアーティストである。オノ・ヨーコは強そうな人だと思っていたけれど、繊細な包容力を併せ持つ。この本を読むと、人は生きていだけでいいのだって思える。詩のような、そうではないような短い文章で、何々しなさいと指図する。読み進めるうちに、自分の想像力は心地よく働き出し、ぼんやりとそれでも前に一歩進みたくなる不思議な本。

『はいくないきもの』 谷川俊太郎／文 皆川明／絵 クレヨンハウス

わかりそうでわからない小気味のいいリズムの文章、そして変な生きものの挿絵。詩人、谷川俊太郎と服飾デザイナーの皆川明のコラボレーション絵本。皆川の絵に、谷川が発想した文字をつけたらしい。皆川はイラストレーターや画家ではない。だからか、ちょこっと固さの残る、しかし自由になろうと争うような抵抗力のある絵。そこにつけられた谷川のことばの意味はわからないのに腑に落ちる。声に出して読んでほしい。

『不思議の国のアリス』 ルイス・キャロル／著 草間彌生／挿画 グラフィック社

最初見たのはニューヨークの知り合いの本棚の中だった。なんて綺麗でモダンな本だと思った。彼の本は英語版で、日本語版と似ているが、英語版の方が装丁はかっこいい。世界中で活躍するアーティスト、草間彌生が描いた絵が散りばめられたこの本には、アリスの絵や物語の内容を説明するような挿絵がまったくない。それでもなぜか不思議の国のアリスにあっている。絵がよく見ると気持ち悪いのもいい。アリスを一回読んでいる人にもおすすめ。

『ジョージア・オキーフとアルフレッド・スティーグリッツ』

ジョージア・オキーフ／画 アルフレッド・スティーグリッツ／撮影 岩波書店

本当はジョージア・オキーフの違う本が好き。でも、その本は手に入らないだろうから、初めての人でもわかりやすいこの本を選んだ。近代絵画の母とも呼ばれるジョージア・オキーフの絵と、その夫であった著名写真家、スティーグリッツの本。オキーフの絵は伸びやかで悠々としている。私は特に大きな花の絵が好き。スティーグリッツが撮影したオキーフはいつでも凛としていて、美しく、おしゃれさん。絵とライフスタイルが見事にマッチしている尊敬する画家。

## 『千利休 無言の前衛』 赤瀬川原平／著 岩波書店

1500年代に活躍した千利休について、前衛芸術家で、作家でもあった赤瀬川原平が書いた本。赤瀬川は利休を前衛芸術家として捉え、その魅力について語る。千利休を通して、年代や東西問わず他の芸術家についても触れる。歴史においては、豊臣秀吉のチャーミングな魅力についても語られている。利休を通して、赤瀬川や現在の芸術にも触れられる豊かな書。

## 『花と人と生きものたち 丸木スマ画集』

丸木 スマ／画 丸木 位里／編集 丸木 俊／編集 小学館

丸木スマは70歳から絵を始めた。絵がのびのびと気持ちがいい。身の周りのものを描いていて、生命が溢れ出している。豊かである。絵は楽しいのだよ、何歳でも始められるのだよと教えてくれる。自分の枠を取っ払って、こんなに正直に描けたらいいなと思う絵がたくさんある。丸木スマは、《原爆の図》を描いた丸木位里、俊夫妻の丸木位里の母でもある。親子のまったく違う表現に驚く。

## 『片岡球子展 文化勲章受賞記念』

片岡 球子／画 朝日新聞東京本社企画第一部／編集 朝日新聞社

片岡球子の絵はユーモアがあるのが好き。ちょっと狂っている線とか、バランスが崩れていて、崩れているからこそその美、そして、絵の力強さは肝っ玉を感じさせてくれる。1903年生まれ的女性が画家を続けられたってことだけでもすごいのに、強烈な個性と画の力強さが見事である。特に富士山の絵はどでんとしていて力強い。私が見た富士の印象と違うので、どこから見た富士なんだろうと彼女の視点や描き方に興味がいく。

## 『独立国家のつくりかた』 坂口恭平／著 講談社

彼はDIYで政府を作ったらしい。タイトルだけ読んだらなんの本かわからないし、彼の職業もわからない。謎の人による謎の本。しかし、ユニークな発想の宝庫である。彼は、枠に収まりきれなかったものを見つけて、自分のものにしてしまうのがとても上手。子どもときの疑問を大人になってもずっと持っていて、やりたいことをやってしまう生き方は、これからの生き方にフィットしているんじゃないかなと思う。最近はパステル画も描いている。

## 『Pints, Books & Things』

Kiki Smith／著 Wendy Weitman／著 Museum of Modern Art

Kiki Smith はアーティスト。特に彫刻で有名である。でも、この本は主に彼女の版画や本、ドローイングや小さな立体を収めた作品集である。多種多様な作品を眺めると、彫刻とか、絵とかいう枠がなくなって、想像したものを作ればいいって思える。制作への喜び、苦悩などのさまざまな感情が作品から伝わってくる。画集は、夜寝る前に見たり、くつろいだりするときに眺めると幸福な一時が味わえる。ときには人生における重要な発見をもたらしてくれる。

## 『バックスの信女ーホルスタインの雌』 市原 佐都子／著 白水社

市原佐都子の演劇の脚本。この演劇を見たかったんだけど人気で予約が取れなかったので、脚本を読んで我慢しようと思った。脚本の良いところは頭の中で自分が演劇を作ってしまうこと。この脚本は、特徴的な言葉使いで、性に関連するネタはいっぱい出てくるけどまったくエロくない。ギリシャ悲劇を大胆に咀嚼というか、色々超えてしまっていて笑い飛ばせる。読後は、結局演劇自体をさらに見たくなった。